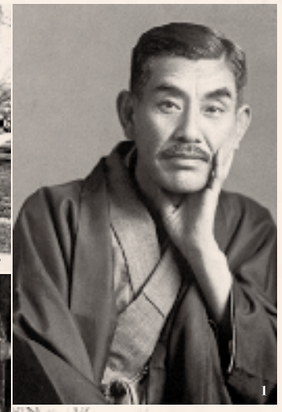
温故知新 北海道大学

挑戦の150年

SCENE-22

1924-1937

「創基五十周年と
クラーク胸像」


1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1. クラーク胸像製作者田嶼碩朗
2. 工学部開学式の際の展覧公開 (1926年)
3. 皇族を迎えた創基五十周年記念式 (1926年)
4. 創基五十周年の提灯行列 (1926年)
5. 附属図書館の資料展覧 (1926年)
6. 関東大震災の際に医学部が派遣した救護班の活動 (1923年)
7. 創基五十周年祝賀の饗宴 (1926年)
8. 洗礼50周年を記念したM.C.ハリス墓参 (1928年)
左から、前列は二期生の廣井勇、内村鑑三、新渡戸稲造、後列は一期生の伊藤一隆、大島正健
9. 「クラーク先生胸像」除幕式 (1926年)
10. 除幕式当日のクラーク胸像 (1926年)
左から一期生の柳本通義、大島正健、内田瀞、黒岩四方之進

「創基」

北海道帝国大学は、一九二六年、札幌農学校開校から五十年を経て「創基五十周年」を迎えた。

大学の設立の起点を表現する語として「創基」は耳慣れない。普通は創立、開学、開校などを使用する。実際に、一九〇一年には「札幌農学校創立二十五周年」と表現していた。しかし、札幌農学校はその後、東北帝国大学農科大学として大学に昇格し、さらに北海道帝国大学として独立を果たした。組織として大きな変化があり、二度にわたり名称を変更しているため、「創立」などの語は使用しづらかった。五十周年記念事業の準備段階では、古典の熟語を複数検討し、「創基」に決定している。以降、この語を使い続け、来年二〇二六年は「創基百五十周年」である。

北海道帝国大学が発案し使い始めた「創基」は、近年、多くの大学が使用している。近世の藩校や私塾の流れを汲んでいたり、複数の学校を統合したなどの大学が、建学の理念や大学の個性を前史に遡って求めたい場合、「創基」はなかなかの便利な妙案であった。

創基五十周年記念式と医・工学部開学式

さて、北海道帝国大学は、一九二六年五月十四日に皇族や文部大臣、北海道庁長官、札幌市長、東北帝国大学総長はじめ、多数の来賓を迎え、創基五十周年記念式を挙行した。同時に、医学部開学式、工学部開学式も行なっている。工学部は前年一九二五年四月に最初の学生が入学したばかりで、当初より五十周年記念式と合わせて開学式を実施する予定であった。一方、医学部は一九二二年四月から学部の講義を開始していたが、一九二三年九月に起こった関東大震災のために、救護団を派遣したり、関東出身の学生の通学に支障が生じたりしたため、開学式を無期延期としていたが、五十周年を機にようやく実施することになった。創基五十周年は、農学部のルーツである札幌農学校が建学の起源であることを確認し顕示すると共に、新たな組織である医学部・工学部を開設したことを宣言し、三学部が拠って立つ大学となったことを示す場となった。

佐藤昌介総長は式辞で「我北海道帝国大学ハ学界ノ権威トシテ立チ帝国ノ文化ト世界ノ学界トニ貢献セント欲スレハ既設学部ノ外ニ尚理法文等ノ学部ヲ速カニ増設シテ最高学府ノ完成ヲ図ルトコロナケレハナラヌト思ヒマス」と述べ、農・医・工学部に加え、理・法・文学部を新設して、総合大学として拡充していく将来像を強調した。

クラーク先生胸像の建立

同日の午後、彫刻家田嶼碩朗が製作した、札幌農学校初代教頭W・S・クラーク胸像の除幕式を行った。「創基」の象徴である。クラーク胸像をめぐっては、ちょっとした悶着も起こった。クラークに直接教えを受けた札幌農学校一期生大島正健は、同期の佐藤総長が進めるクラーク胸像の除幕式に異論があり、欠席の意志を示していた。しかし、同じく一期生の伊藤一隆から祝辞の代役を懇請され、同窓会関係者の説得もあり除幕式に出席した。大島は祝辞で母校の発展を言祝ぎつつも、「学校ノ盛衰ハ外形ノ完備ニ非ズシテ内容ノ充実ニ帰ス。而シテ職員及学生ノ精神之ニ関スルコト最モ大ナリ。今ヤ先生ノ像ハ北方ニ向ッテ拡張セラレントスル此大学ニ面シ眼光烱々トシテ学風ノ荒廃ヲ監視セラルヽニ似タリ」と述べた。また、二期生の内村鑑三は創基五十周年に来札することを拒み、この日の小樽新聞に「クラーク先生の精神いま何処」と題した批評文を掲載して「クラーク先生の精神は札幌に残ってゐると思ひません。残ってゐるのは先生の名であります。そして今度先生の銅像が出きたとのことであります。併しそれだけであります」と苦言を呈している。

大島も内村も、五十周年を迎えた北海道帝国大学の姿が、彼らに深い感化を与えた札幌農学校とは掛け離れてしまっていることへの違和感を表明した。三十年にわたり、安定的な学校経営と着実な拡充を目指してきた現実路線の佐藤総長との懸隔は甚だしく、母校愛の向かう方向、クラークを仰ぎ見る視線の先は異なっていた。

佐藤総長は、一九三〇年に北海道帝国大学に理学部を設置したのを機に勇退した。大島は、最晩年の一九三七年、クラークの評伝『クラーク先生とその弟子達』を出版した。

「今ヤ校庭将ニ春色ヲ帯ヒントスルノ時亭々タル喬木ノ下ニ凜然タル先生ノ胸像ヲ見ルハ寔ニ欣懐ニ堪ヘサル所ナリ。希クハ先生ノ威霊長ヘニ亙リテ本大学後進者ノ渇仰スル所トナランコトヲ」（クラーク胸像除幕式における佐藤昌介総長祝辞）

Hokkaido University
HISTORY
1924-1937

1924年 2月 - 農学部協議会において50周年記念祝典について提議
1925年 6月 - 札幌同窓会がクラーク先生胸像を建立することを決定
8月 - 銅像製作者につき正木直彦東京美術学校長に相談（田嶼碩朗に決定）
1926年 3月 - 『創基五十年記念 北海道帝国大学沿革史』（中島九郎教授執筆）刊行
5月14日 創基五十周年記念式、医・工学部開学式を挙行
クラーク先生胸像除幕式
学内展覧（～16日）
学生生徒提灯行列
5月15日 学術講演会（～16日）
5月16日 陸上競技場開場式、運動会を実施
5月17日 競技大会実施
1930年 4月 - 理学部設置
12月 - 佐藤昌介総長勇退
1937年 7月 - 大島正健『クラーク先生とその弟子達』出版

大学文書館 だいがくぶんしょかん Hokkaido University Archives
北海道大学に関する歴史的な資料を収集・整理・保存して利用に供するとともに、北海道大学史に関する調査・研究を行っている。